

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 鄒 韻

論文題目 近代日本・中国における女性同性愛
—性科学の受容から 1920年代女性主体表現まで—

論文審査担当者

主 査 名古屋大学教授 星野幸代
委 員 名古屋大学教授 飯田祐子
委 員 名古屋大学教授 松下千雅子
委 員 神戸大学教授 濱田麻矢

本論は近代日本と近代中国における同性愛概念の浮上に着目し、性科学・言説・文学において女性同性愛がいかに関与されたのかを明らかにしようとしたものである。

以下、本論文の概要と審査結果を報告する。

[本論文の概要]

序章では、まず本論で用いる「同性愛」(中国語「同性恋」)とは英語の“homosexuality”に相当し、またそれは18世紀以降の西欧の性科学におけるクラフト＝エビングの経典で用いられた術語“Homosexualität”に由来することを確認した上で、本論の三つの研究目的を提起している。一、同性愛がほぼ犯罪視されなかった日本と中国の文脈において、性科学はいかに導入され位置づけられたかを跡付ける。二、女性解放の機運が高まる1920年代、西洋の性科学は「新しい女」のセクシュアリティを理解するための「知」として機能していたことを論証する。三、文学研究において下位文化とされてきた女学生・女性同士の絆を語る文学テクストを読み直し、再評価する。これらの三つの問題を、本論は第一部では日本を対象に、第二部では中国を対象として論じた。セクシュアリティをめぐる理論的立場としては、ホモセクシュアリティの本質性は否認しないとした上で、歴史的な文脈による構築主義の視座を取る。

第一部第一章では、明治末期から大正期の日本に受容された代表的な西洋の性科学として、ドイツおよびオーストリアの精神科医クラフト＝エビング、イギリスの性科学者ヘンリー・ハヴロック・エリスおよび思想家エドワード・カーペンターの理論を取り上げ、それぞれの導入とその関係性を分析している。19世紀ヨーロッパでは男性同性愛に関する医学的な研究が進み、医学的言説は同性愛を脱犯罪化させる役割を果たした一方、同性愛を病理化させ、同性愛者というアイデンティティを成立させることとなった。日本では、近代より前には文化的に男性同性愛は殆どタブー視されず、ホモセクシュアリティの概念は開化セクソロジー(明治期の性科学ブーム)とともに導入された。近代日本における同性愛をめぐる言説の医学的基礎となったのが、クラフト＝エビングの理論であった。当初その理論は医学の知識として受容されたが、次第に通俗化し、大衆化されたクラフト＝エビング理解に基づいて同性愛は性的倒錯と見なされるようになった。エリスとカーペンターの主張は、本来は同性愛の脱犯罪化の上で見解を共にしているが、日本では対峙する言説として受容された。エリスの女性同性愛に関する文章は『青鞥』においてレズビアニズムを排除する「正しいセクシュアリティ」の根拠とされ、フェミニズム運動における女性同性愛の病理化を強化した。いっぽう、カーペンターは同性愛の精神性を強調することによって女同士の「同性愛」を擁護する理論として援用され、「同性愛」の病理化に反発する理論として機能した。

第一部第二章では、明治末期から大正期日本において、性科学の浸透によって女性同士の親密な関係がいかに関与していったかを考察している。女学生同士の恋愛は、まずは文明開化の下での女学生特有の問題として理解された。その後、性的倒錯の医学理論に基づいて女性同性愛者は男性的な女性と同一視される段階があり、同性愛が個人の属性ないしアイデンティティとして認識されるようになり、「同性愛者」が構築されて行くさまがうかがえる。

第一部第三章では、女学生・女性同士の絆を語る文学テクストの読み直しとして吉屋信子の『花物語』(1916-1924『少女画報』連載)をとりあげ、女同士の愛がいかに関与しているかを考察した。『花物語』は初期・中期・後期と連載が進むにしたがって、徐々に逸脱と規範という両義的な意味を提示するようになる。だが、読者である少女たちの投書を読み解くことにより、『花物語』のテクストは、彼女たちの「解釈共同体」においてその性的な逸脱性が抹消され、体制に合致するジェン

ダー規範にそって受容されたことが分かる。吉屋はこうした少女雑誌という場では語りえないものを他の媒体で発表した。第四章は吉屋信子のそのような作品として『屋根裏の二処女』(1920)と『或る愚かしき者の話』(1925)を取り上げ、医学的な言説と交渉しながら、近代の女性同性愛者がいかに描かれているのかを分析している。『屋根裏の二処女』は、主要女性人物たちの先天的な食欲の欠如と、物語が設定された閉塞的な空間をメタファーとして、性科学受容後の時代の女性たちが同性愛者として主体を成立させた出発点を描いたと解釈できる。屋根裏を代表とする空間の重層性は、亀裂が入っては再生する流動的なアイデンティティを象徴している。『或る愚かしき者の話』では、ヒロインの内面の語りにも性科学からの明確な影響が見られ、彼女が医学的言説を内面化し、レズビアンとしての主体がひび割れていく様子が読み取れる。吉屋信子が「同性愛者」を語る際の「語りにくさ」と彼女自身のアイデンティティの揺らぎによって、ヒロインのアイデンティフィケーションにおいて、「自認」と「クローゼット」との間隙に同性愛の欲望は一時的に封印されたのである。

第二部第一章では、近代中国におけるクラフト＝エビング、ヘンリー・ハヴロック・エリスおよびエドワード・カーペンターの性科学の受容を跡付けた。清朝末期、西洋の書籍は日本を經由して中国に翻訳されることが多かったが、クラフト＝エビングも同様であり、そのため中国の性科学理解は日本の開化セクソロジーと類似している。ただ、日本ではまず医学書として受容されたものが、中国では「強国保種」に合致する性科学、または国家や民族の生の文明論として理解された。カーペンターは1920年代を中心に翻訳されて同時代の中国知識人に大きな影響を与えた。日本で大正期に定着した同性愛の用語や概念は、中国語でそのまま流通するようになったが、「同性愛」をめぐるクラフト＝エビング派とカーペンター派の議論には、性科学をめぐる構造的な知識体系の欠如がうかがわれる。エリスについては、潘光旦が1940年代を中心にある程度系統立てて翻訳した。潘は医学の専門家よりも一般の読者を意識し、エリスの訳本に付された彼の注釈・解説には、同性愛を病理化する主張が表明されている。

第二部第二章では、近代日本との比較を視座として、1920年代の中国における女性同性愛の語り方を検討した。同性愛をめぐるのは、当時二つの問題をめぐって対立する言説が見られた。一つは学校教育における同性愛をめぐる問題で、男女別学のもと、同性愛は成長過程の一時的な行動として予防すべき弊害なのか、それとも男女の自由恋愛の前段階として性教育として理解できるかという論争である。もう一つは婦人運動の延長として、女性知識人の家父長制的な婚姻に対する拒否としての「同性愛」をめぐる論争である。いずれも女性のセクシュアリティの解放やそれに対する警戒と結び付けて議論され、賛否両論が見られた。

第二部第三章は、長らく反封建・反帝国主義等をテーマとする小説が高く評価されてきた盧隱の作品について、社会的視点に欠けるとされていた作品を取り上げ、中篇「海濱故人」を中心に再読した。日記体と書簡体を駆使した本作は、異性愛制度に入ることに躊躇し葛藤するヒロインの精神的な未熟さをそのままに表現した、女性の自己形成の物語として読み直すことができる。この作品によって、盧隱はその初期創作で民族・社会問題にしばられていたフェミニズムの声を解放し、女としての主体の語りを模索した先駆者として再評価されるべきであることを論証した。

第四章は、近代中国における女性作家冰心、盧隱、謝冰瑩の作品を中心に、同性愛をめぐる様々な回想録を掘り起こし、当事者はどのような思い出として「女性同性愛」を語ったのかを考察した。1920年代の回想録では、女同士の「同性愛」は既に過ぎ去った美しい思い出として語られ、往時に戻りたいという告白が主流である。1930年代にはいと、女同士の「同性愛」をめぐる言説は革命

思想の波にのまれ、それは女学生の未熟な行為であり、成長に有害であるという言説に変化したといえる。

[論文の評価]

本論は日本と中国における性科学の受容についてそれぞれ根拠を示しつつ丹念に追ひ、それを踏まえて同時代の社会的事件および小説において女性同性愛がいかに関与され、女性同性愛をめぐる言説がどのように変化しつつ形成されていったかを、日本と中国双方について検討しようとした意欲的な論文だといえる。各論部分では、吉屋信子のテキストが含んでいる攪乱性が、女学生読者たちの解釈共同体によって社会規範に合った読みに帰着してしまう現象を論証した節は説得力があり、さらに吉屋信子作品について先行研究が相反する解釈を示している状況に対し、一つの帰結を与えたといえる。日本社会の言説として、性倒錯理論に基づき、女性「同性愛」と男性的な女性を結びつける図式が形成されていたという指摘も新しい。また、中国文学においては、有名作家の作品だけでなく無名な女学生たちの語りを合わせて考察することにより、女同士のエロティシズムのより広範な共鳴を浮上させ、同性愛をめぐる女学生文化の存在をある程度明らかにした。さらに女学生の同性愛をめぐる語りの変遷として、美しい思い出であったものが未熟で健全な成長を妨げる利己的な恋愛と評されるようになり、1930年代にいたって同志愛が取って代わるまでの一つの筋道を示した点も評価できる。

ただ、性科学の受容の日中比較論としては、医学としての性科学が日本語訳を介して中国に受容されたことには考察がなされているが、日本と中国の受容の差異は言説においてはいかなる形で現れたのであろうか。また、受容された性科学がどのように有機的に創作に結びつくかについて、吉屋信子については検討されているが、中国人女性作家たちは性科学にどれほど知識、関心があり、どの程度意識的に創作したのであろうか。性科学の受容を踏まえることにより、作品に対していかなる新しい読みが可能になったのか。これらの問題についてはまだ検討の余地があると思われる。なお、フェミニズムの問題とエロティシズムの問題との関連、伝統的な同性愛に相当するコードと西洋の性科学のコードとの関連性、女性の軍隊における同性愛のあり方など、考察を深めることが望ましい。

しかしこれらの課題は本論文の全体的な評価を損ねるものではない。本論文は、上述の通り、独創的な問題提起と精緻な分析により、セクシュアリティの日中比較、レズビアン文学、近代日本文学および近現代中国文学のいずれの研究分野においても優れた貢献を果たしたといえる。また、申請者の特質として、独創性のある立論と論理的思考、それを飛躍することなく誠実に展開する文章力に、研究者としての優れた力量がうかがえた。

したがって、論文審査委員は全員一致で、本論が博士学位論文として水準に達していると判断した。